大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

高校生の無気力感の実態

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2011-09-12
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 松山, 晴彦, 桐村, 雅彦
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004724

高校生の無気力感の実態

松山 晴彦*1・桐村 雅彦

はじめに

高等学校の教員にとって、高校生の実態を把握することは不可欠であり、特に現在の高校生の主体性のなさは以前から気がかりになっていた問題である。無気力感がこの主体性のなさと関係しているのではないかと思い、本研修ではこの問題を課題として、実態調査によって高校生の無気力感について調べることにした。

三無主義（無気力・無関心・無責任）や四無主義（三無主義に無感動を加える）、さらに学生や生徒の無気力傾向が、現代青少年の一般的傾向（深谷, 1990、波多野・稲垣, 1981、笠原, 1977、加藤, 1987）として取り上げられるようになり、中学や高校の学校現場からも生徒の無気力傾向が指摘されてきた。実際、高校現場では、保健室や教育相談で取り上げられ重篤な無気力状態、いわゆるstudent apathyと定義づけられたものばかりでなく、一般の生徒の間でも土川(1985)や稲村(1986, 1989, 1991)たちが示唆したように「無気力」「やる気のなさ」「しらけ」と言われるような状態が蔓延してきている。実際、私自身も教壇に立って、このような状態を感じている。例えば、「学級行事に関してのロングホームルームで意見が述べられない」「多数決でも手を挙げない」「あげくの果てに、『先生決めて下さい』と言ってくる」。また、進路指導でも「自分が生きたい学校がわかりません」「今の成績でいける学校を探して

＊1　1996年度府大学派遣研修員・現大阪府立大手前高等学校教諭

くれ」と頼んでくる。自分自身の将来のことなのに教師に依頼してくるこの現状、これでも高校生なのだろうかと思ってしまう。

また頼藤（1995）も、主体性がなく時代の波に流されている現代の高校生の姿を説明している。この様な若者たちは、無気力が病気や精神的な病の入り口であるなどとは少しも思っておらず、これが自分の周囲にいる若者たちと同じで普通であると思って生活している。また逆に彼らは、主体性を持って生きている若者が異常であるとも思っている。そこで本課題では、笠井ら（1995）が「『精神病の無気力とは異なり、心理的な原因で、日常生活の様々な場面において意欲の減退を示す状態像』と、また、その心性を無気力感と定義して」行った小・中学生の無気力感調査を基にし、対象者を高校生に変えて調査をし、小・中学生との違いを比較・検討する。そして、今後の生徒指導資料の一助にするために、高校生の実態を考察することにする。

高校生の無気力感調査

調査１では、日常生活における無気力感の指標とする項目を選択し、高校生の無気力感の態様を明らかにする。調査２では、調査１から得た高校生の無気力感の現状と日常生活の諸側面との関連について検討する。

調査対象者

調査対象者は、大阪府立の５高校13学級の高校生472名（男子225名、女子247名）であった。

調査内容

調査方法は、村松・保坂（1994）の「無気力感尺度作成の試み－標準中学生版を第一報として－」を参考に、５つの観点から高校生用に作り替えた50の質問項目によっておこなった。５つの観点とは、①授業や学習の態度とテスト有

能感(10項目)、②生活のリズム・疲労・身体不調(11項目)、③生活や人生の目標・将来の見通し(9項目)、④達成感・動機づけ・自己効力感(10項目)、⑤社会的場面での非能動性とひきこもり(10項目)であった(調査1)。さらに日常生活と無気力感の関連性を調べるために、彼らの日常生活実態を7つの側面、①学校での成績の自己評価、②起床時間、③就寝時間、④家庭学習の時間、⑤放課後の行動(塾・予備校・部活動・アルバイト)、⑥仲のよいグループの有無、⑦親友の有無、についての質問項目を設けた(調査2)。

調査時期と方法

調査を依頼した高等学校の各学級の授業担当者に調査方法を説明して、平成8年9月に学級ごとに集団で一斉実施した。調査1の実施時間は10分から15分で、調査2の実施時間は約5分であった。

結果の処理

調査1の無気力感尺度の項目については、「とてもそう思う」「かなりそう思う」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の4段階評定で回答を求め、無気力傾向が高くなるように4から1の得点を与えた(逆転項目については得点を1から4と反転させた)。また調査2の日常生活実態においては、学業成績の自己評価が5段階評定で上位の1から5まで、起床時間が6段階評定で5時半前から30分刻みで1から6まで、就寝時間が5段階評定で10時前から1時間刻みで1から5まで、家庭での学習時間が6段階評定で0時間から1時間刻みで1から6で、そして放課後何をしているかが「部活動、塾・予備校、アルバイト」の3つそれぞれの有無で、仲のよいグループや親友についても有無で、それぞれ計7問に回答を求めた。

なお、無気力感尺度や日常生活実態の分析などのデータ処理にあたっては、DOSベースの統計処理ソフトSASを使用した。

結果と考察

調査1：高校生の無気力項目

図1は、無気力に関わる質問50項目を個々に平均値と標準偏差を求め、平均値の高い順に示したものである。無気力感を感じている最高得点項目は「テストがなければ、学校はもっと楽しいだろう(27)」で、高校生にとって年間数回行われている定期考査などは、勉強するしないに関係なく、いつも気がかりになって重苦しいことなのであろう。続いて観点②の「生活のリズム・疲労」からの項目が、「すぐあくびがでる(26)」「疲れて授業中ぼーっとしてしまうことがおおい(20)」「いろんなことがめんどうくさくなることがおおい(48)」「すぐ体がだるくなってしまう(36)」と並んでいる。これらから、学校生活以外の日常生活でも、いつも疲労や無気力感を感じながら過ごしている様子がうかがえる。逆に、あまり無気力感を感じていない得点の低い項目は、観点⑤「社会的場面での非能動性・ひきこもり」からの「友達と遊ぶのがめんどくさい(8)」「友達といっしょにいるとくたびれる(4)」などや、観点④「達成感・動機づけ・自己効力感」からの「人生は運命で決まっているので、自分ではどうすることもできない(17)」「もっとよい成績をとりたい(逆転：12)」「勉強以外で熱中しているものがある(逆転：7)」「努力すれば、それだけのことは得られる(逆転：31)」などがある。これらは、友達関係には比較的問題が無く、人生に前向き・積極的に努力していこうと思い、本業の学業成績もよくしたいと思っているようだ。

調査1：因子分析による尺度項目の決定

無気力感評定50項目で総得点が上位または下位約33%に属する被験者を抽出し、t検定でG-P分析を行った結果、12番と27番以外の質問項目に有意差($p<.01$)が認められた。そこでこれら2項目を除いた残りの項目に因子分析(主因子解→バリマックス回転）を施した。固有値が1.0以上の基準で13因子が

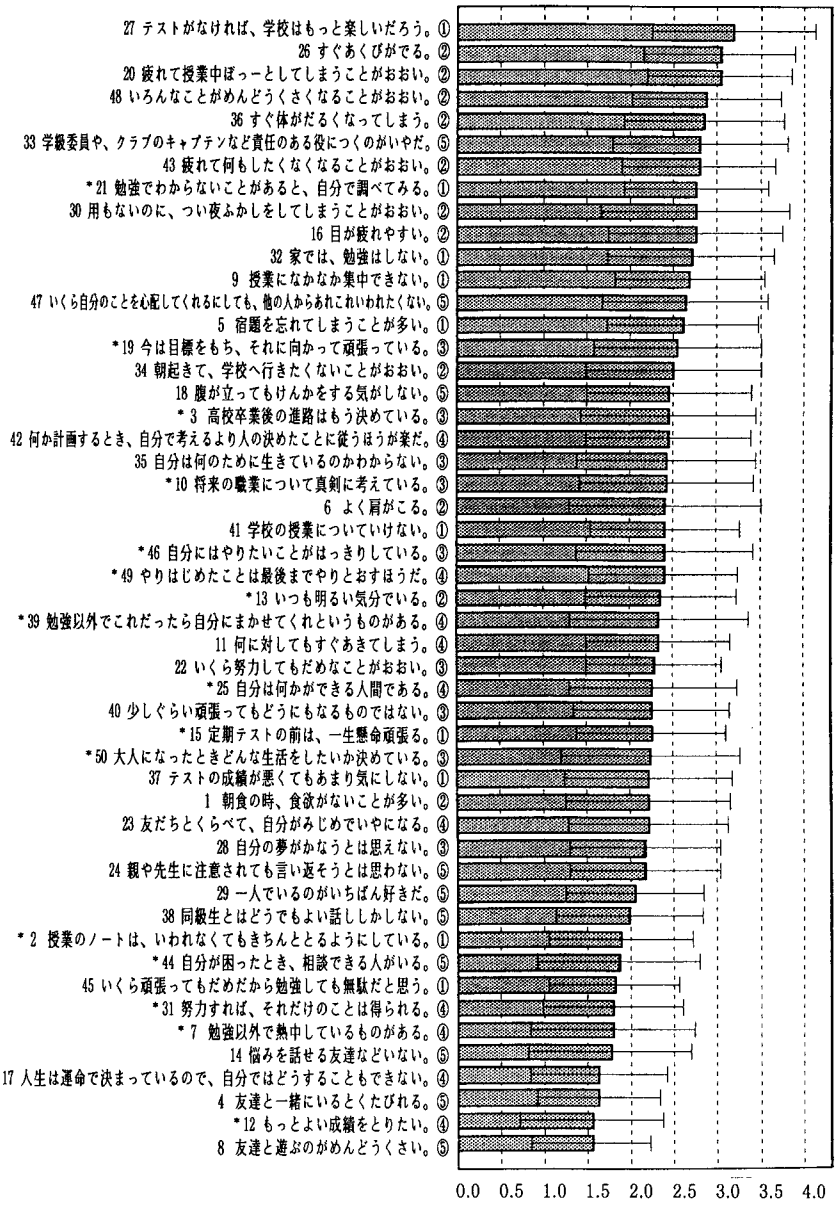

図1　高校生の無気力項目別の平均値と標準偏差

（＊の項目は逆転項目、数字は項目番号、○数字は観点）

抽出されたが、因子数を限定して分析を繰り返し行い、分析内容の結果から7因子解を採用した。因子分析の結果から下位尺度を構成するにあたり、原則として1つの因子に因子負荷量が絶対値で0.41以上の項目を基準にして選択した。この結果が表1で、各因子の解釈と命名にあたっては、笠井ら(1995)の小学生・中学生についての報告を参考にして次のように命名した。第1因子は、「意欲減退・身体的不全感」で疲れやめんどうくささを表し。第2因子は、「積極的な学習態度の欠如」で学習を表し。第3因子は「消極的な友人関係」で、友人関係への積極的でない態度を表し。第4因子は「将来の展望の欠如」で、将来の職業や生活設計を考えているか否かを表し。第5因子は「無力感・劣等感」で、友達より自分が劣っていると感じ、人生や学習に努力することへの無力感を表し。第6因子は「あきらめ・自信喪失感」で、途中で投げ出してできないとあきらめる自信のなさを表し。そして、第7因子は「悩みの相談相手の不在」で、悩みを真剣に打ち明けたり話せる友達がいるかどうかを表している。

図2は表1の下位カテゴリーごとの平均値と標準偏差を図示したもので、「意欲減退・身体不全感(F1)」が最も高く、次いで「積極的学習態度の欠如(F2)」、「将来の展望の欠如(F4)」で、「悩みの相談相手の不在(F7)」がもっとも低かった。

笠井ら(1995)の調査の小・中学生と本調査の高校生とでは、いくつかの違いが見られた。小学生では、下位カテゴリー平均値の最高が「学習不適応感」、最低が「身体不全感」と「消極的友人関係」であった。中学生では、最高が「意欲減退・身体不全感」で、最低が「消極的友人関係」であった。本調査の高校生で最高は「意欲減退・身体不全感」で、最低からは「悩みの相談相手の不在」「消極的友人関係」であった。本調査の高校生で最高の「意欲減退・身体不全感」は、笠原ら(1995)の小学生で見られた「だるい」「頭が痛い」などの身体的側面の無気力感と、中学生での「面倒くさい」「ぼーっとしてしまう」などの気分的側面の無気力感との二側面が、合わさった無気力感へと変化している。また「将来の展望の欠如」の多さは、中学生に比べて、大学・短大や専

表1　高校生の無気力調査結果のカテゴリー平均値と因子分析結果

No.	項　　目		カテゴリー平均値	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	F 6	F 7	共通性推定値
36	すぐ体がだるくなってしまう。	②	2.83 (0.59)	0.71	0.18	0.13	0.08	0.06	0.05	0.02	0.57
43	疲れて何もしたくなくなることがおおい。	②		0.59	0.10	0.14	0.07	0.14	0.11	-0.04	0.41
48	いろんなことがめんどうくさくなることがおおい。	②		0.55	0.23	0.09	0.05	0.15	0.23	0.15	0.47
20	疲れて授業中ぼっーとしてしまうことがおおい。	②		0.51	0.40	0.00	-0.02	0.07	-0.06	-0.11	0.44
26	すぐあくびがでる	②		0.51	0.06	-0.08	-0.09	0.07	0.07	-0.02	0.29
16	目が疲れやすい。	②		0.42	-0.08	-0.03	-0.13	0.10	0.02	0.08	0.22
34	朝起きて学校へ行きたくないことが多い。	②		0.41	0.24	0.20	-0.02	0.14	0.16	0.05	0.31
*2	授業のノートは、いわれなくてもきちんととるようにしている。	①	2.44 (0.55)	0.16	0.59	-0.04	0.01	0.07	-0.01	0.05	0.39
9	授業になかなか集中できない。	①		0.34	0.58	-0.01	0.10	0.08	0.00	-0.13	0.49
*15	定期テストの前は、一生懸命頑張る。	①		0.01	0.54	0.02	0.07	0.09	0.05	-0.12	0.36
32	家では、勉強はしない。	①		0.14	0.51	-0.08	0.23	0.09	0.02	-0.03	0.23
37	テストの成績が悪くてもあまり気にしない。	①		0.07	0.50	0.02	0.03	-0.09	0.06	0.17	0.23
*21	勉強でわからないことがあると、自分で調べてみる。	①		-0.07	0.46	-0.17	0.10	0.22	0.14	-0.17	0.36
5	宿題を忘れてしまうことが多い。	①		0.19	0.44	-0.03	0.10	0.01	-0.06	0.07	0.25
41	学校の授業についていけない。	①		0.26	0.43	-0.17	0.08	0.22	0.07	-0.13	0.36
8	友達と遊ぶのがめんどうくさい。	⑤	1.91 (0.54)	0.09	-0.13	0.77	-0.08	0.08	0.07	-0.03	0.63
4	友達と一緒にいるとくたびれる。	⑤		0.07	0.01	0.72	-0.13	0.02	0.14	0.13	0.58
29	一人でいるのがいちばん好きだ。	⑤		0.11	-0.11	0.50	-0.02	0.04	-0.04	0.19	0.31
38	同級生とはどうでもよい話しかしない。	⑤		0.14	0.02	0.44	0.02	0.11	0.10	0.24	0.29
*13	いつも明るい気分でいる。	②		0.08	0.01	0.43	0.13	0.19	0.07	0.09	0.26
*46	自分にはやりたいことがはっきりしている。	③	2.41 (0.73)	0.07	0.03	0.04	0.70	0.10	0.19	-0.03	0.55
*10	将来の職業について真剣に考えている。	③		-0.07	0.10	-0.08	0.65	0.09	0.05	0.07	0.46
* 3	高校卒業後の進路はもう決めている。	③		0.00	0.19	-0.04	0.62	0.06	0.02	0.03	0.43
*19	今は目標をもち、それに向かって頑張っている。	③		0.01	0.19	0.05	0.62	0.15	0.19	0.00	0.48
*50	大人になったときどんな生活をしたいか決めている。	③		-0.11	0.03	0.02	0.50	0.11	0.13	0.19	0.32
*31	努力すれば、それだけのことは得られる。	④	2.07 (0.56)	-0.01	0.22	0.08	0.15	0.56	0.09	0.01	0.40
22	いくら努力してもだめなことがおおい。	③		0.21	0.05	0.12	0.07	0.55	0.00	0.06	0.37
45	いくら頑張ってもだめだから勉強しても無駄だと思う。	①		0.09	0.35	-0.03	0.16	0.52	0.06	-0.02	0.43
40	少しぐらい頑張ってもどうにもなるものではない。	③		0.14	0.23	0.12	0.04	0.48	0.11	0.14	0.35
23	友だちとくらべて、自分がみじめでいやになる。	④		0.27	-0.02	0.14	-0.01	0.43	0.01	-0.13	0.29
11	何に対してもすぐあきてしまう。	④	2.33 (0.64)	0.29	0.12	0.12	0.02	0.09	0.55	-0.06	0.45
*39	勉強以外でこれだったら自分にまかせてくれというものがある。	④		-0.08	-0.10	0.05	0.24	0.10	0.55	-0.07	0.40
*49	やりはじめたことは最後までやりとおすほうだ。	④		0.11	0.26	-0.07	0.10	0.09	0.48	-0.07	0.38
*25	自分は何かができる人間である。	④		0.05	-0.05	0.02	0.13	0.39	0.46	0.03	0.38
*44	自分が困ったとき、相談できる人がいる。	⑤	1.81 (0.05)	-0.03	-0.06	0.25	0.12	0.16	0.09	0.71	0.63
*14	悩みを話せる友達などいない。	⑤		-0.03	-0.09	0.36	0.11	0.16	0.03	0.60	0.54
			寄与率（%）	14.40	8.10	3.60	6.90	4.20	3.30	2.90	
			α係数	0.77	0.77	0.73	0.78	0.70	0.63	0.79	

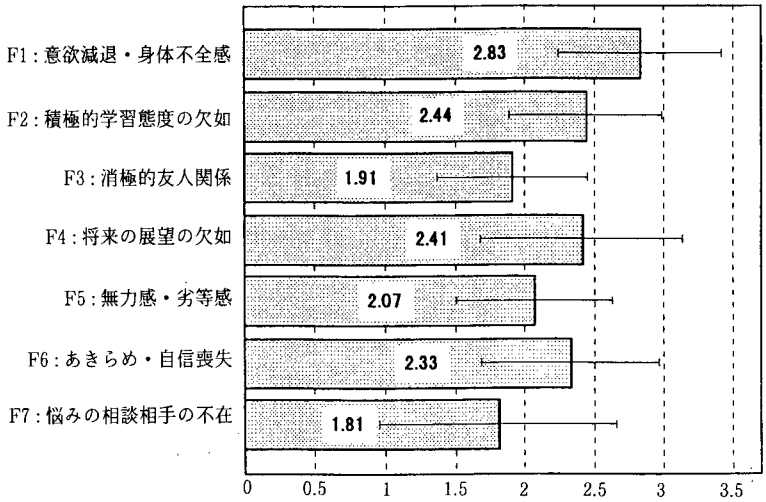

図2 因子カテゴリーごとの平均値と標準偏差

門学校への進学、進学後の将来の生活をも見通した就職などに、直面せざるを得ないからであろう。

高校生の傾向が、中学生と似かよっているのは、思春期や青年期という同質の発達時期にあることの証かもれない。小学校とは異質な学校環境での勉学や生活などのすべてが原因となって、中学生も高校生もともに無気力感が、学習面から意欲面へ、さらに身体疲労感へと変移、拡大しているようだ。中学生と高校生の違いは、中学生が「意欲減退・身体不全感」「充実感・将来の展望の欠如」「積極的学習態度の欠如」「消極的友人関係」、そして「無力感・あきらめ」の5因子であったものが、高校生では表1や図2の7因子へと増加していることである。中でも、「悩みの相談相手の不在」という因子の独立は、高校生が中学生以上に、人間関係をはじめ多様な悩みを抱えているからであろう。容姿や体、異性関係、性などについて身心共により成熟した高校生ならではの悩みである。この種の悩みは、親や先生、時には学校の友だちにも相談しにくいのかもしれない。アルバイト先の仲間など、相談にのってくれる人を高校生は欲

しているようでもある。これからの高校には、正面から悩みの相談相手になってくれる人（例えばスクール・カウンセラー）が必要なのではないだろうか。

表2は、下位カテゴリーごとの男女差とα係数(信頼性係数)、さらに下位カテゴリー相互の相関を示している。

まず男女間の差において、男子は「消極的友人関係(F3)」と「悩みの相談相手の不在(F7)」が女子よりも高いので、男子は人間関係の維持・形成に苦手意識が強いようである。笠井ら(1995)は、この傾向が小学生や中学生にも見られることを指摘している。女子が男子よりも差が大きいのは「あきらめ・自信喪失感(F6)」であり、小さいながら差があったのが「意欲減退・身体不全感(F1)」と「積極的学習態度の欠如(F2)」であった。女子は、男子以上に友人との関係において心理的な結びつきを重要視し、それゆえ友人や仲間と比較しながら自分を評価し判断することが多くなっているのだろう。その結果、自信をなくし、やる気や学習への意欲を失うことになっているのだと思われる。女子が、「どうせ女だからやっても無駄だ」とか「女だからやらなくても良い」などの気持ちに向かわないことを望みたい。笠井ら(1995)の中学生で男女差のあった「将来の展望の欠如(F4)」が、高校生で男女差が無くなったのは、先

表2　高校生の下位カテゴリーの平均値、男女差、信頼性係数およびカテゴリー間の相関係数

カテゴリー名	項目番号	カテゴリー平均値(標準偏差)	男女差 男子 女子	α係数	下位尺度間相関 F1	F2	F3	F4	F5	F6
意欲減退・身体不全感 F1	16, 20, 26, 34, 36, 43, 48	2.83 (0.59)	2.77＜2.89	.76						
積極的学習態度の欠如 F2	2, 5, 9, 15, 21, 32, 37, 41	2.44 (0.55)	2.38＜2.49	.72	39**					
消極的友人関係 F3	4, 8, 13, 29, 38	1.91 (0.54)	1.99≫1.85	.73	.22**	-.05				
将来の展望の欠如 F4	3, 10, 19, 46, 50	2.41 (0.73)	2.44　2.38	.78	.04	.26**	.02			
無力感・劣等感 F5	22, 23, 31, 40, 45	2.07 (0.56)	2.06　2.08	.70	.38**	.34**	.24**	.24**		
あきらめ・自信喪失感 F6	11, 25, 39, 49	2.33 (0.64)	2.20≪2.45	.63	.24**	.18**	.15**	.31**	.32**	
悩みの相談相手の不在 F7	14, 44	1.81 (0.85)	2.12≫1.53	.78	.05	-.07	.44**	.17**	.18**	.12**

下線の項目番号は逆転項目、** はピアソン相関係数の有意水準(**:P＜.01)、＜, ＜＜ は t 検定の有意水準(＜:p＜.05, ＜＜:p＜.01)

の考察を裏付けている。

下位カテゴリー間の相関係数では、笠井ら(1995)の中学生で5因子間すべてに有意な相関あったが、本調査の表2では「意欲減退・身体不全感(F1)」と「将来の展望の欠如(F4)」・「悩みの相談相手の不在(F7)」に、「積極的学習態度の欠如(F2)」と「消極的友人関係(F3)」・「悩みの相談相手の不在(F7)」に有意な相関が得られなかった。後者の「積極的学習態度の欠如」と「消極的友人関係」・「悩みの相談相手の不在」に相関がなかったことは、学習への態度のありようが、友人関係などに左右されるものではないことを示している。

相関係数が0.3以上の関係を順に検討するならば、まず、「消極的友人関係(F3)」と「悩みの相談相手の不在(F7)」の相関が強いのは至極当然のことであるが、笠井ら(1995)の中学生では人間関係に関する因子は「消極的友人関係」だけであった。高校生での人間関係に2つの因子が表れたのは、悩みを抱えた時に打ち明ける友人も必要だが、時に友人以外の誰かに悩みを聞いてもらいたいことをも示している。学校での友達、ボーイフレンドやガールフレンド、先輩などと、悩みに応じて相談相手を選んでいる。それゆえ、高校生の悩みは、学習面だけでなく、友人・異性関係、将来のこと、自分の自信のなさなどと広範囲にわたって生じてくるのだろう。「意欲減退・身体不全感(F1)」と「積極的学習態度の欠如(F2)」、「意欲減退・身体不全感(F1)」と「無力感・劣等感(F5)」の相関は、体の疲れなどから日々の学習や生活において意欲ややる気をなくしていることを示している。「積極的学習態度の欠如(F2)」と「無力感・劣等感(F5)」の相関は、生活の中でのやる気のなさが、学ぶことの大切さへの認識を失わせ、学習への意欲低下をもたらし、やってもダメだめな自分だと、受け入れているからかもしれない。「将来の展望の欠如(F4)」と「あきらめ・自信喪失感(F6)」、「無力感・劣等感(F5)」と「あきらめ・自信喪失感(F6)」の相関は、高校生には学校間格差があるためか、自分は頑張っても希望の大学には行けないとか、進学は無理で就職しかできないなど、自分への自信のなさがあきらめを生み、将来の展望も明るくとらえず悲観的に対応し、万事におい

て前向きで真剣に考えることができない様子を示しているようだ。

調査1と調査2：無気力尺度と日常生活の関連

表3は、左半分に下位カテゴリーと日常生活（成績の自己評価、起床時間、就寝時間、学習時間）とのピアソン相関係数を、右半分に下位カテゴリーと各生活実態（部活動、塾・予備校、アルバイト、仲の良いグループ、親友）の有無との関係を示している。

成績の自己評価、起床時間、就寝時間、学習時間との関連

下位カテゴリー得点と日常生活との関係で、有意で大きい相関は「積極的学習態度の欠如(F2)」と「成績の自己評価」や「学習時間」との間にある。これは、学習意欲のない生徒ほど自分の成績を低く判断しており、学習時間とは負の相関なので学習時間が短いことを示している。また「意欲減退・身体不全感(F1)」と「成績の自己評価」や「学習時間」との関係も、「積極的学習態度の欠如」と同じように、体が疲れていたりやる気のない生徒も、学習時間が短く成績の自己評価も低いことを示している。「将来の展望の欠如(F4)」と「成績の自己評価」「起床時間」「学習時間」の小さな相関も、自分の将来を閉塞的にとらえた生徒が、自己評価を低くし、朝起きるのも遅く、勉強もほとんどしないことを示している。「無力感・劣等感(F5)」と「成績の自己評価」「学習時間」の相関は、自分への低い評価が、無力感や劣等感の裏付けとなり、あきらめや頑張っても無理という気持ちが強くなっていることを示している。ともあれ「成績の自己評価」が「あきらめ・自信喪失感(F6)」を除く他の6因子と相関していることから、高校生の気持ちの中では、自分の成績が良くないことが、自分のやる気のなさや無気力、友達とのつき合いの拙さなどと直接・間接に結びついているようだ。また「学習時間」の長さは、学習態度は言うに及ばず、間接的に高校生の意欲や展望のなさを見せてくれている。なお笠井ら(1995)の中学生で、「無気力感」の強さは「学業成績の自己評価」の低さ、「起床時間」の遅さ、「学習時間」の短さと関係していた。高校生で「無気力」

表3　高校生における下位カテゴリー得点と日常生活との関連

カテゴリー名		成績の自己評価	起床時間	就寝時間	学習時間	部活動 参加(221)	部活動 不参加(250)	塾・予備校 通う(59)	塾・予備校 いいえ(412)	アルバイト はい(137)	アルバイト いいえ(334)	グループ 有(436)	グループ 無(34)	親友がいる はい(385)	親友がいる いいえ(84)
意欲減退・身体不全感	F1	.20**	.05	.14**	-.20**	2.72	2.93	2.78	2.84	2.94	2.78	2.83	2.88	2.80	2.96
積極的学習態度の欠如	F2	.53**	.09*	.10*	-.58**	2.35	2.52	2.22	2.47	2.60	2.37	2.44	2.42	2.43	2.47
消極的友人関係	F3	-.12**	-.03	.04	.09	1.84	1.98	1.94	1.91	1.84	1.94	1.87	2.44	1.82	2.31
将来の展望の欠如	F4	.15**	.11**	.03	-.26**	2.32	2.48	2.19	2.44	2.39	2.41	2.40	2.48	2.39	2.50
無力感・劣等感	F5	.20**	.02	.05	-.13**	1.99	2.14	2.05	2.07	2.12	2.05	2.06	2.24	2.02	2.28
あきらめ・自信喪失感	F6	.01	.03	.07	-.06	2.20	2.44	2.35	2.33	2.35	2.32	2.31	2.60	2.30	2.47
悩みの相談相手の不在	F7	-.12**	.04	-.06	.06	1.80	1.82	1.82	1.81	1.54	1.92	1.77	2.31	1.64	2.58

はピアソン相関係数の有意水準（: p<.01）、〈, 〈〈はt検定の有意水準（〈:p<.05, 〈〈:p<.01）。日常生活の（　）の数字は人数。
相関関数：成績の自己評価で正は成績を低く評価、起床と就寝の時間が正は時間が遅くなる、学習時間で正は時間が長くなる。

と「起床時間」や「就寝時間」に相関がなかったのは、受験勉強やアルバイトで朝早くから夜遅くまで起きていることが影響しているのかもしれない。高校で学ぶ目的や目標がはっきりせず、単なる好き嫌いや興味のあるなしで、授業を受けることは、時として無気力感を育てることになっているのかもしれない。画一的でなく学びたいことを中心に学べるような教育になるように工夫することが、高校生の無気力感をうち砕く方策なのかもしれない。

部活動、塾・予備校、アルバイト、仲の良いグループ、親友との関連

下位カテゴリーごとの部活動への参加・不参加の関係は、部活動に参加している生徒の方が統計上有意に低い得点である。これは、活動内容や練習方法などで異なるが、部活動への参加によって活動目標が「技術の向上、試合への参加と勝敗、大会やコンクールへの出場や発表など」と明確になり、目標に向かって能力の限界に挑む頑張りや、上級生や下級生と協同して活動することが可能になる。さらには、高校生活全般にも目標となるものが生まれ、達成感が得られやすくなるからであろう。しかし、部活動参加者には無気力感が生じにくいといって、短絡的に全員参加の部活動作りや強制入部では、無気力感はなくならないだろう。「好きなことを、目標を持ってする」という自主的な活動であることが、十分いかされていてこそ部活動に意味がある。

塾や予備校へ通っている生徒数が全体の14%と少ないが、通っている生徒は日頃から学習に積極的態度を示しており、多分大学進学であるのだろうが、将来のことをも考慮しているようだ。

アルバイトをしている生徒は、全体の29%であった。アルバイトをすることによって、生徒は意欲減退や疲労感をより強く訴えており、その結果としてか、生活のリズムを乱し学習態度に積極性が見られなくなっている。しかし、アルバイトをしていない生徒が悩みの相談相手がいないと感じていることから、アルバイト先での店長や先輩の大学生などを悩みの相談相手としているとも推測できる。アルバイトによって勤労体験をするという指摘は、他者への対応を含

む予備知識や社会的技能を習得するという利点も考えられるが、高校生としての本業である学業がないがしろになってしまう現状では勧められるものではない。ただアルバイトを単に禁止するだけではなく、悩みの相談相手の問題をアルバイト以外の場でどのように確保できるかを考慮しておくことが必要である。

仲のよいグループの有無では、友人関係の積極さは仲良し仲間にいることで育まれており、その中には悩みを相談できる相手がいるようである。また自分への自信は、グループを通して人との関わりを学べ、その中で自分の存在が認められ、自分を見つめ直す機会ができていると思われる。

親友の有無では、82%の生徒には親友がいると回答している。親友がいることは、グループの大小に関係なく仲間の一員であること意味しており、友達などのおつき合いができる人の存在が、無気力感を克服する一因であることを示している。

調査を踏まえた今後の課題

無気力といわれ続けている高校生たちは、「誰かがどうにかしてくれる症候群」と呼ばれている若者たちでもあり、単なる無気力だけではなくて色々な問題を抱え込んでいる。かつての日本では、日々の生活に追われ、子供も多く、一人一人に充分な世話ができなかった。ところが、子供を取り巻く現在の社会状況は、少子化や核家族化、さらには豊かな経済状態などによって、有り余るぐらいに子供を世話することができるようになってきた。親が子供のためにとレールを敷き、子供はただ何も考えることもなく、敷かれたレールの上を信号に従って走っている。また、品物をもいやというほど買い与え、子供が望んでいない品物までも与える親さえ見受けられる。このような環境の中から、子供たちに自主性など育つはずもなく、これからも誰かに援助されなければ日々生活ができなくなるのか、不安である。また逆に、自主性を育てるのだといって、何を間違ったのか子供を放任している家庭もある。「自主性」などと耳障りが良いが、これは親の仕事（養育・教育）の放棄としか思われない。このような

家庭環境で育つ高校生たちには、現下の高校に見受けられる様々な問題が将来も表れてくるだろう。しかし反面において、阪神大震災や原油流失事故に対応した高校生は、積極的で生き生きとしており、ボランティアでの活躍は素晴らしいものであった。やればできるという気持ちは、高校生にあるはずである。まわりの大人たちが、そうさせない環境を作ってしまっているのではないだろうか。高校生や若者たちを責める前に、大人の我々が彼らとの関係の持ち方を反省しなければならないのかもしれない。

このように相反する顔を見せる現代の高校生の教育を担っていく上で、考慮しておかなければならないことが沢山ある。

1．学習面での無気力感は、決められた授業が、高校生の好き嫌いや興味のあるなしに関係なく一方的に行われていることから派生している。これを解決するには、画一的な教育課程を考え直す必要があるだろう。生徒の真の自主性を尊重し、自分で学びたいことが学べるような教育システムに変えていくことが必要である。

2．無気力感の原因が日常生活にも根ざしていることや、無気力感が分化していることなどから考えると、ほとんどの高校生が何らかの分野で無気力感を感じているといえる。そこで、生徒全体をひとまとめにした生徒指導ではなく、それぞれの生徒個人に応じたきめ細かい指導をする必要がある。

3．高等学校間に格差があるので、入学した高校であきらめ感を抱いている生徒がいるようだが、学校生活での目的を待たせ自己の最善を尽くすように指導するように心がけねばならない。

4．部活動は、高校生が目標を持って頑張ることができる良い活動である。部活動参加者が少なくなってきている現在、部活動が抱えている諸問題（顧問、活動時間、活動費用など）について教員間で話し合い、外部コーチの招聘なども含めた部活動の活性化を考えることが求められる。

5．アルバイトは、学習面から見れば良い点がないのでやめさせるべきだ。しかし、生活上の相談相手を求める高校生には、アルバイトなどで相談相手

を見つけなくても良いように高校内にスクールカウンセラーのような悩みを話し相談できる人を配置すべきであろう。

6．人間関係が巧くいけば、高校生活を有意義に送ることができるという点を考えて、教師は、高校生の人間関係が円滑になるように良き相談相手となることが求められる。

7．高校生が目的を持って通学できる学校、すなわち、「行ける高校」から「自分がこれこれの目的でこの高校に来た」と言える特徴ある学校作りを目指す必要があると思う。

ま と め

本課題では、笠原らが行った小学生・中学生の無気力感とその関連要因の調査を参考に、大阪府下の高校生を対象として無気力感と日常生活との関わりを調べた。

無気力感についての質問項目を因子分析した結果、7因子が無気力感を知る要因として抽出された。それらは、「意欲減退・身体不全感(F1)」、「積極的学習態度の欠如(F2)」、「消極的友人関係(F3)」、「将来の展望の欠如(F4)」、「無力感・劣等感(F5)」、「あきらめと自信喪失感(F6)」、そして「悩みの相談相手の不在(F7)」であった。これらの因子から得られた下位尺度と日常生活実態との関連分析によって、高校生の無気力感の態様は大まかであったが十分理解することができた。また、高校生教育への今後の指針も示すことが出来た。

謝　辞

この調査にあたり、大変お忙しい折り快く調査を引き受けて下さった高等学校の先生や生徒の皆さんに感謝いたします。また、大阪府立大学総合科学部の心理学の先生方に指導・助言をいただき、データ分析では井手亘先生に大変お世話になりました、感謝の意を表します。

引用文献

深谷昌志　1990　『無気力化する子どもたち』　NHK出版

波多野誼余夫・稲垣佳世子　1981　『無気力の心理学』　中央公論社

稲村　博　1986　『思春期のこころのカルテ』　国土社

稲村　博　1989　『若者・アパシーの時代』　NHK出版

稲村　博　1991　アパシーの現状と取り組み方　教育心理, 39, 12-15.

笠原　嘉　1977　『青年期－精神病理学から－』　中央公論社

笠井孝久・三浦香苗・保坂　亨　1994　小学生・中学生における無気力感の構造　千葉大学教育相談センター年報, 11, 13-26.

笠井孝久・村松健司・保坂　亨・三浦香苗　1995　小学生・中学生の無気力感とその関連要因,教育心理学研究, 43, 424-435.

加藤隆勝　1987　『青年期の意識構造』　誠信書房

村松健司・保坂　亨　1994　無気力感尺度作成の試み　千葉大学教育相談センター年報, 11, 1-12.

清水將之　1996　『思春期のこころ』　NHK出版

土川隆史　1985　スチューデント・アパシーと生活リズム　教育心理, 33, 771-773.

頼藤和寛　1995　『だれかがどうにか症候群』　日本評論社

Apathy of Hight School Students

Haruhiko Matsuyama and
Masahiko Kirimura

The purpose of this article was to have clarified the current state of high school students' apathy by our questionnaire survey. The questionnaire consisted of two kinds of inquiries. One is 50 items to ask their apathetical behaviors in everyday lives. These items have belonged to one of five viewpoints: 'attitude to study and competence to test', 'rhythm and fatigue of life and physical disorder', 'achieved experience, motivation and self-efficacy' and 'passivity in social interaction'. Another is asked the lify-styles of seven areas: self assessment of school record, the hour of rising, total times spent in homework, after-school activities (private school, club activities and part-time jobes), the existence of companies and the existence of the good friends. In this inquiry, the participants were 472 students (225 males and 247 female) of 13 classes in five public high schools in Osaka prefecture. In the first inquiry, we were able to obtained seven factors from 50 items by the factor analysis. They were interpreted as follows: 'decline of desire and physical disorder', 'passive attitude to study', 'passivity in forming a friendship', 'lack of hope to the future', 'unefficacy and inferiority complex', 'resignation and lack of confidence' and 'absences of partners to be self-disclosed'. Seven factors of this inquiry were carefully compared with five viewpoints in the preceding research. The result of the second inquiry was analyzed by relating to each seven factors of the first inquiry. And then, we were able to point out some consideration to the high school education.